

キャリア関連諸能力と「オタク力」との関係

藤川 大祐¹⁾ 渡邊 文枝²⁾ 見館 好隆³⁾ 小野 憲史⁴⁾

千葉大学教育学部¹⁾ 早稲田大学²⁾ 北九州市立大学³⁾ 東京国際工科専門職大学⁴⁾

本稿では、キャリア形成に関する諸能力と「オタク力」との関係について検討した。まず、中央教育審議会(2011)による「基礎的・汎用的能力」を取り上げ、これが強調されれば、学習者の特性が捨象されかねないことや、具体的な職業と切り離して扱われやすいことが懸念され、「オタク」自認者に不利益を与える可能性があることが確認された。次に、他のキャリア関連諸能力と「オタク力」との関係について検討した。「キャラクター・ストレングス」について「オタク力」に関する強みが過小評価されないことの重要性が、「ライフキャリア・レジリエンス」について「オタク力」を活かすことによって伸長できる可能性等が、「透過性調整力」について「オタク」の経験によって伸長する可能性もそうならない可能性もあることが、「進路選択自己効力感」について「オタク」としての経験が受容され進路決定に活かされることで向上につながる可能性が、それぞれ示された。

キーワード：キャリア形成、オタク、オタク力、キャリア教育、基礎的・汎用的能力

1. はじめに

1.1. キャリア形成と「オタク力」

藤川ほか(2022)で詳しく検討したように、ある種のことろに関するマニアを意味する「おたく」あるいは「オタク」(以下、「オタク」表記で統一する。)という語は、蔑称として用いられることが多かったものの、自らを「オタク」と自認することによって自己肯定感や差別に対する防御能力につながるものと考えられる。藤川(2020)では、「学校で特段求められているもの以外で、自分が好きだと思える何らかのことろについて、独自の仕方発揮できるマニア的な能力」(p.9)としての「オタク力」に着目し、「オタク力」に着目することによる学力向上の可能性について検討した。渡邊ほか(2021)では「オタク力」を「趣味として何らかのことろに没入することによって獲得/伸長されることが期待される能力であり、他の領域においても活かせるもの」と定義し直した。

見館ほか(2021)では、この意味での「オタク力」が企業で働く際にどのように活かせるのかを、企業の人等へのインタビューによって検討し、「一つの事柄に没入するプロセスにおいて獲得した、最後までやり抜く力と、自らの活動を積極的に情報発信する力、そして活動を通して出会った仲間を結び付ける力が、相互にプラス

の影響を与えながら仕事に活かす可能性がある。しかし、その力を持つ人材の獲得にはリファラル採用と面接の工夫、およびその人材を組織に馴染ませるコーディネーターの存在が欠かせないこと」の示唆を得た。

「オタク力」がキャリア形成にどのように活かせるかについての研究は継続中であるが、一つのことろに没入してきたことによって得られた能力を職業等で活かせる可能性があること、そしてそうした能力は無条件で活かされるのではなく職場等の環境に一定の条件が求められることは容易に想定できる。

他方、これまでも中央教育審議会(2011)による「基礎的・汎用的能力」をはじめ、キャリア関連の能力としてさまざまな能力が各所で提起されてきた。こうした諸能力と「オタク力」の関係を検討することにより、キャリア形成において「オタク力」がどのように活かされるか、「オタク力」が活かされるためにどのような条件が必要かといった点について示唆を得られるものと考えられる。また、こうした検討を通して、キャリア諸関連能力をキャリア教育等に活用する際に留意すべき点等についての示唆も得られるであろう。

1.2. 本稿の目的と方法

本稿の目的は、主に日本におけるキャリア形成に関する能力として提起されている諸能力と「オタク力」との関係について検討し、「オタク力」がキャリア形成にどのように活かせるか、及び、「オタク力」を活かすにはどのような条件が必要かについて、示唆を得ることである。

そのための方法は、以下の通りである。

第一に、現状で日本におけるキャリア教育に大きな影

Daisuke FUJIKAWA¹⁾, Fumie WATANABE²⁾, Yoshitaka MITATE³⁾ and Kenji ONO⁴⁾ : Relationships between Career Abilities and “Otaku-Power”

¹⁾ Faculty of Education, Chiba University

²⁾ Waseda University

³⁾ The University of Kitakyushu

⁴⁾ International Professional University of Technology in Tokyo

響を与えている中央教育審議会（2011）による「基礎的・汎用的能力」について、中央教育審議会自体における説明や「基礎的・汎用的能力」について論じた文献について、「オタク力」を活用する観点から検討を行う。

第二に、2012年以降にキャリア教育やキャリア形成に関して出された文献から上記「基礎的・汎用的能力」以外のキャリア関連能力を抽出し、「オタク力」を活用する観点から検討を行う。

2. 「基礎的・汎用的能力」と「オタク力」

2.1. 「基礎的・汎用的能力」

2022年現在、学校におけるキャリア教育の考え方の根拠となっているのは、中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」（中央教育審議会、2011）である。文部科学省のサイトにおける「キャリア教育に関する答申、報告、会議」のページ¹においても、この答申が最初に掲載されている。

中央教育審議会（1999）において学校におけるキャリア教育の推進が提起されて以降、小学校から発達の段階に応じてキャリア教育が実施されるようになった。しかしながら、これ以降の学校におけるキャリア教育の状況について、中央教育審議会（2011）は「従来の教育活動のままでよいと誤解されたり、（中略）職場体験活動の実施をもってキャリア教育を行ったものとみなしたりする傾向が指摘されるなど、一人一人の教員の受け止め方や実践の内容・水準に、ばらつきがあることも課題としてうかがえる」（pp.17-18）として、課題があることを指摘している。中央教育審議会（2011）は、中央教育審議会（1999）やキャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議（以下、「協力者会議」とする。）（2004）において勤労観や職業観の育成が扱われていたことにより、「勤労観・職業観の育成のみに焦点が絞られてしまい、現時点においては社会的・職業的自立のために必要な能力の育成がやや軽視されてしまっていることが課題として生じている」（p.18）と述べている。

協力者会議（2004）は、「職業観・勤労観を育む学習プログラムの枠組み（例）」の題目の下、「職業的（進路）発達にかかわる諸能力」として、四つの「領域」と八つの「能力」を示している。これらはその後、「4領域8能力」と呼ばれるようになった（表1として整理した）。

中央教育審議会（2011）は、上記「4領域8能力」をはじめ、中央教育審議会（1996、2008a）の言う「生きる力」、中央教育審議会（2008b）の言う「学士力」、内閣府の人間力戦略研究会（2003）の言う「人間力」、経済産業省（2006）の言う「社会人基礎力」、厚生労働

表1 協力者会議（2004）による4領域8能力

領域	能力
人間関係形成能力	自他の理解能力
	コミュニケーション能力
情報活用能力	情報収集・探索能力
	職業理解能力
将来設計能力	役割把握・認識能力
	計画実行能力
意思決定能力	選択能力
	課題解決能力

省（2004）の言う「就職基礎能力」、経済同友会（2008）の調査、OECDの言う「キーコンピテンシー」といったものに言及した上で、「社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な力に含まれる要素」は、以下によって構成されるものと考えてとしている。

- ・基礎的・基本的な知識・技能
- ・基礎的・汎用的能力
- ・論理的思考力、創造力
- ・意欲・態度及び価値観
- ・専門的な知識・技能

これらの構造は、図1のように示されている。図では、「意欲・態度及び価値観」、「論理的思考力、創造力」、「基礎的・汎用的能力」の三つは、同じ水準に位置付け

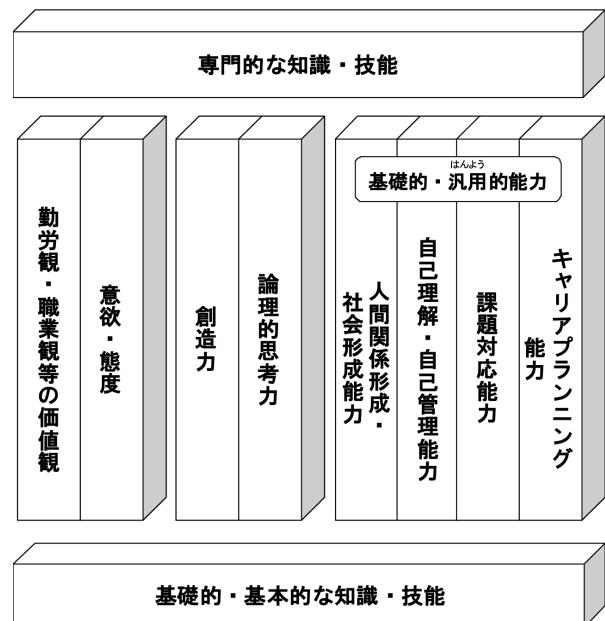


図1 「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力の要素」（中央教育審議会、2011）

られている。しかし、中央教育審議会（2011）は、「基礎的・汎用的能力」については約 2 ページ（pp.25-26）をかけて説明しているのに対し、「意欲・態度及び価値観」や「論理的思考力、創造力」については、特段の説明をしていない。中央教育審議会（2011）が、キャリア教育で育成すべき能力として、「基礎的・汎用的能力」を重視していることは明らかである。

国立教育政策研究所が 2011 年に作成した教育委員会向けキャリア教育支援資料²は、「中教審が示すキャリア教育の新たな方向性」として、『4 領域 8 能力』から『基礎的・汎用的能力』へと明確に述べ、図 2 のように、「意欲・態度及び価値観」や「論理的思考力、創造力」には全く触れずに「基礎的・汎用的能力」のみを強調した図を掲載している。当時の文部科学省の姿勢として、キャリア教育で育成されるべき能力として「基礎的・汎用的能力」のみが強調されていたことが確認できる。

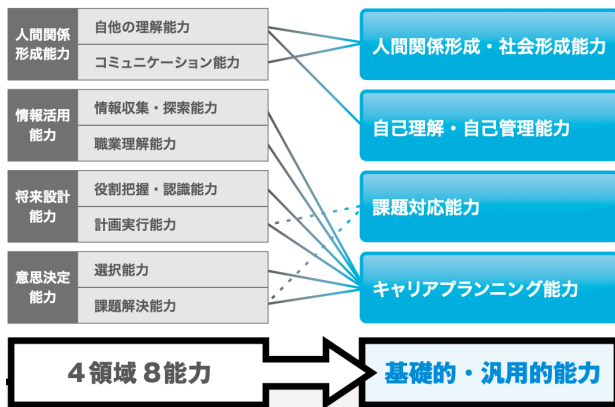


図 2 国立教育政策研究所が 2011 年に作成した教育委員会向けパンフレットにおける「基礎的・汎用的能力」への転換を示した図

なお、村上（2016）が指摘しているように、2011 年以前のキャリア教育が学校教育における勤労観・職業観育成を中心として展開されてきたのに対して、中央教育審議会（2011）は職業的自立に加えて社会的自立をも包含してキャリア教育を扱っている。この方向転換は、勤労観・職業観等がキャリア教育の周縁に追いやられ、「基礎的・汎用的能力」がキャリア教育の中心に据えられるようになったことに影響しているものと考えられる。

安藤（2021）の整理によれば、勤労観・職業観が何を指しているか不明確であること、「価値観の強要」となる恐れがあること等の点で、勤労観・職業観の強調が批判されてきた。こうした批判も、中央教育審議会（2011）で勤労観・職業観等の扱いが縮小されたことに影響を与えているものと考えられる。

2.2. 「基礎的・汎用的能力」と「オタク力」

では、「基礎的・汎用的能力」がキャリア教育の中心となったことは、「オタク力」の観点からどのように捉えられるであろうか。

藤川ほか（2022）で論じているように、「オタク力」は、当人が自嘲語としての「オタク」を自認することによって、逆説的に「オタク」である自身を肯定したり、他者からの「オタク」であることに対する批判から防御したりすることにつながるものだと考えられる。

こうした「オタク」のあり方は、「基礎的・汎用的」とされる能力の一部の欠如を受け入れることと不可分である。「オタク」には、未成熟さ、興味関心の偏り、他者とのコミュニケーションにおける困難といったことがらで連想されるのであり、「人間関係形成・社会形成能力」や「キャリアプランニング能力」を発揮して社会的に自立していくことを求めるのは難しいように思われる。

山田（2020）の調査によれば、「オタク」を自認する者は、職業によって社会への貢献や自己実現を図ろうとしない傾向や差別を容認する傾向が高い（p.414）。このことから、「オタク」を自認する者が、「基礎的・汎用的能力」を獲得し、職業によって社会貢献や自己実現しようとする意欲をもつようになるのは容易ではないことがわかる。

以上のように、「オタク」を自認する者にとって、「基礎的・汎用的能力」の要求は、苦手と感じられることの無理強いに感じられる可能性が高い。他方、「オタク力」への注目は、「基礎的・汎用的能力」を高めることを求めず、「オタク」であることと不可分な能力や経験を活かすことにつながりうる。「基礎的・汎用的能力」が求められる状況にあるからこそ、代替策として、「オタク力」に着目したキャリア教育のあり方が検討されるべきだと考えることもできるだろう。見館ほか（2021）も、「オタク力」が活かされるためには、採用時や採用後にその人材を組織に馴染ませる等の工夫が必要であることを示しており、「基礎的・汎用的能力」が一律に求められるべきでないことがわかる。

別の点として、「基礎的・汎用的能力」が中心に据えられたことに伴い、キャリア教育において具体的な職業との関わりが後退していることが指摘できる。勤労観・職業観の扱いが後退していることをはじめ、「基礎的・汎用的能力」を構成する四つの「能力」のうち、「キャリアプランニング能力」はともかくとしても、「人間関係・社会形成能力」、「自己理解・自己管理能力」、「課題対応能力」は、具体的な職業と切り離して扱われやすいものと考えられるからだ。

このことも、「オタク」を自認する者に深刻な影響を与えている可能性がある。見館ほか（2021）で明らか

にしているように、具体的な企業の人事担当者等は、「オタク力」に対しておおむね好感を抱いており、「基礎的・汎用的能力」のみを求めているわけではない。それゆえ、児童生徒が実際の企業の人等と関わる機会があれば、たとえ「基礎的・汎用的能力」が高くなくても、言わば相性の合う人や職場と出会うことが十分に期待される。このような考え方は、本田（2013）が「基礎的・汎用的能力」を身につけさせるものとしてのキャリア教育より「仕事のリアル」を伝えることを重視すべきだとしていることとも合致する。

「基礎的・汎用的能力」を強調すれば、学習者の特性は捨象され、すべての者が同様の能力を身につけることばかりを目指したキャリア教育が実施されることとなる。だが、社会において仕事は分業によって成り立っているため、各自が自らの特性を活かせるような業務や働き方を選択することが求められるはずである。「基礎的・汎用的能力」の強調と、これに伴うキャリア教育からの具体的な職業の扱いの後退は、社会において多様な人材を育成するという観点からも、「オタク」を自認する者が自らに合うキャリア教育を受けるといった観点からも、問題であると考えられる。

3. 他のキャリア関連諸能力と「オタク力」

3.1. 他のキャリア関連諸能力

では、「基礎的・汎用的能力」以外に、キャリア関連能力としてどのような能力が扱われることがあるだろうか。2012年以降の日本国内の文献から、「基礎的・汎用的能力」、そして「学士力」や「社会人基礎力」等、「基礎的・汎用的能力」と類似のものを除き、キャリア教育あるいはキャリア形成に関連する能力として挙げられ、複数の文献において扱われているものを抽出したところ、以下が得られた。

「キャラクター・ストレングス」
 「ライフキャリア・レジリエンス」
 「透過性調整力」
 「進路選択自己効力感」

以下、それぞれについて概観する。

「キャラクター・ストレングス」³とは、「ポジティブ心理学」と呼ばれる心理学手法で扱われる概念であり、高橋・森本（2019）によれば、人が活躍したり最善を尽くしたりすることを可能にさせるような特性のうち性格特性によるものを指す。伊住ほか（2021）によれば、これは、24の道徳的な強みからなる人格特性である。伊住ほかは、学習者が「道徳的な強み」であるキャラクター・ストレングスを自覚し、活用を促すことで、

「社会で生かすことのできる自分のよさの自覚と社会で認められる自分のよさの活用」ができ、「キャリア発達に対応する自己理解を促すことができる」と言う。

「ライフキャリア・レジリエンス」は、高橋・鈴木（2019）によれば、「不安定な社会の中で自らのライフキャリアを築き続ける力」（p.28）と説明されており、障害者対象の講座の受講者には「人生のいろいろな場面で思うようにならないことがあっても自分らしく歩む力」（p.31）と説明されている。これを測る「ライフキャリア・レジリエンス尺度」は、「現実受容、多面的生活、長期的展望、楽観的思考、継続的対処」の五つの下位尺度から構成される。荒木ほか（2020）は、中学生が地域の大人や大学生と対話するキャリア教育プログラムにおいて、自尊感情とともに「ライフキャリア・レジリエンス」も向上したことを報告している。

「透過性調整力」は、後藤・久保（2016）によれば、交流分析で言う「私」、「大人」、「子供」といった自我状態⁴を状況に応じて自在に切り替える力のことである（p.2）。伊吹・木原（2021）は、キャリア教育においてこの「透過性調整力」にメタ認知との相関が見られることを報告している（p.18）。

「進路選択自己効力感」⁵（Career Decision-Making Self-Efficacy）は前場（2019）などで引用されているように、「自分が進路決定に必要な課題を成功裡に達成することができる」と信じている程度（Betz 2001）のことである。前場は、大学生の進路選択自己効力感が、大学生が進路決定を進める「行動変容ステージ」が進むにつれて基本的には上昇すること、しかし1ヶ月以内に行動を行う意図がある「準備ステージ」においては上昇が見られないことを明らかにし、準備から実行への移行における進路選択自己効力感の向上が課題であることを指摘している（p.43）。

以下、それぞれの能力と「オタク力」の関係について検討していこう。

3.2. 「キャラクター・ストレングス」と「オタク力」

Park & Peterson（2009）は、キャラクター・ストレングスを「行為の中の価値」（Values in Action）のリスト（表2）として示し（pp.2-3）、学校や青少年向けプログラムが、若者の問題や弱点を迫る一方でキャラクター・ストレングスのような前向きな尺度での測定をしないことを指摘し、学校等でキャラクター・ストレングスを測定し、高めることに注意が払われるべきだとしている。そして、優しさというキャラクター・ストレングスを高めるためには、単に「最善を尽くす」のではなく毎日新しい一人の人に挨拶をするようにするというように、具体的で測定可能な目標を設定し、達成するための行動計画を立てることが必要であると言う。

表 2 「行為の中の価値」(Values in Action) としてのキャラクター・ストレングスのリスト (Park & Peterson 2009 をもとに引用者が作成)

知恵と知識 wisdom and knowledge	創造性 creativity
	好奇心 curiosity
	オープンマインド open-mindedness
	学習愛 love of learning
	見通し perspective
勇気 courage	正直さ honesty
	勇敢さ bravery
	持久性 persistence
	熱意 zest
人間性 humanity	親切さ kindness
	愛 love
	社会的知性 social intelligence
正義 justice	公平さ fairness
	リーダーシップ leadership
	チームワーク teamwork
節制 temperance	許し forgiveness
	穏やかさ modesty
	慎重さ prudence
	自制 self-regulation
超越性 transcendence	美と卓越の評価 appreciation of beauty and excellence
	感謝 gratitude
	希望 hope
	ユーモア humor
	宗教性 religiousness

発達障害の人とキャラクター・ストレングスについて論じた Niemiec *et al.* (2017) は、ユーモアが理解されにくかったり、頑固さが自分の考えに固執していると解されたりすること等、自閉症スペクトラム等の発達障害の人についてはキャラクター・ストレングスが過小評価されることがあることに言及し、枠を作り直すリフレーミングによってキャラクター・ストレングスを活かすための支援がなされうことを指摘している。

キャラクター・ストレングスは、一見、多くの能力のリストであり、「基礎的・汎用的能力」と重なるもののように思われるかもしれない。だが、キャラクター・ストレングスはすべてをバランスよく高めようとするものではなく、各人が自分の強みを伸ばすために使われるものである。キャリア教育で活用するのであれば、各人がその後の仕事を含む人生において、自らの強みをどのように伸ばし、活かしていくかを考えるために使われることになるだろう。

「オタク力」は、キャラクター・ストレングスの中のいくつかと重なるものと考えられる。たとえば、特定の趣味等に没入することを通して、好奇心、学習愛、持久性、熱意といったことが強みとなっている可能性は高い。また、同じ対象に没入することを通して、親切さ、社会的知性、感謝等が強みとなっているかもしれない。「オタク」として活動し、「オタク力」を高めることは、いくつかのキャラクター・ストレングスを強くするものと考えられる。

しかし、「オタク力」は、基本的に学校で扱われない趣味等に没入することで得られるものであるため、これまでの学校教育においては特に注目されることがなかった。このため、「オタク力」に関わるキャラクター・ストレングスは、発達障害をもつ人の場合と同様に、学校教育においては過小評価されてきた可能性がある。学校教育、特にキャリア教育において、「オタク力」に注目がなされることによって、キャラクター・ストレングスを高めることにつながることを期待される。

3.3. 「ライフキャリア・レジリエンス」と「オタク力」

「ライフキャリア・レジリエンス」は、「キャリア・レジリエンス」をキャリアのみならずライフキャリアにまで拡張したものである。高橋・鈴木 (2019) によれば「ライフキャリア」という概念は Super (1980) によるものである。ただ、Super は、キャリアを生涯の間に人が演じる役割 (たとえば、学生、市民、労働者、配偶者、親など) の組合せ及び順序と定義した上で、多様な役割が並行して進む様子をライフキャリアレインボーとして表現したのであり、「キャリア」と「ライフキャリア」を区別しているとは読み取れない。こうしたことを踏まえると、「ライフキャリア・レジリエンス」を「キャリア・レジリエンス」と区別すべきかどうかについては、慎重である必要がある。

「キャリア・レジリエンス」は、London (1983) によって提起された概念である。London はキャリアモチベーションに関わる個人的性格として、キャリア・アイデンティティ、キャリア・インサイト、キャリア・レジリエンスの三つを挙げている。これらのうちキャリア・レジリエンスについては、最適ではない環境におけるキャリア崩壊への抵抗であり、否定的な仕事の状況に効果的に適合できることであるとされている。London は、キャリア・レジリエンスの下位領域として、自己効力感、リスク・テイキング、独立性を挙げている。日本国内においては、児玉 (2015) がキャリア・レジリエンスの構成概念を検討した結果、「チャレンジ・問題解決・適応力、ソーシャルスキル、未来志向、援助志向」の四つを構成概念としている。高橋・鈴木 (2019) で示されている「ライフキャリア・レジリエンス」の下位尺度「現

実受容、多面的生活、長期的展望、楽観的思考、継続的対処」との間で違いは大きく、「ライフキャリア・レジリエンス」とキャリア・レジリエンスとの関係については今後さらに研究が求められる。

「オタク力」について見ると、これらのうち「ライフキャリア・レジリエンス」の下位尺度との間に関連を見出すことができそうだ。「オタク力」があるということは、学業や仕事や家庭人といった役割とは別に、趣味等に没入する人という役割を生きていることを意味する。没入できる対象があることにより、他の役割が直面する現実を相対化した多面的生活を送り、キャリアにおける困難に対して長期的かつ楽観的に考え、対処することが可能となると考えられる。

荒木ほか（2020）は、中学生が地域の大人や大学生と対話するキャリア教育プログラムにおいて「ライフキャリア・レジリエンス」が向上したことを報告している。中学生にとって、大学生や大人に話を肯定的に聴いてもらったり、多様な価値観に触れたりすることが、「ライフキャリア・レジリエンス」向上に寄与したものと考えられる。こうした報告を踏まえれば、「オタク」としての中学生や高校生が、「オタク」としての自分の話を年長者に聞いてもらったり、多様な「オタク力」をもった年長者と接したりすることが、「ライフキャリア・レジリエンス」向上に寄与することも十分に考えられる。

3.4. 「透過性調整力」と「オタク力」

「透過性調整力」(Permeability Control Power) は、水野ほか（1995）が交流分析の概念である「透過性」(Permeability)を援用したもので、「透過性を調整する力」すなわち「内外の刺激に応じて自我状態を適切に切り替える力であり、自我状態の切り替えのよさの程度」と説明されている。

水野ほかが「透過性調整力」の項目としたのは表3の10項目である。Y-G 性格検査との相関から、「透過性調整力」が高い人には、楽観的で、気分が安定しており、自信があり、神経質でなく、客観的で、協動的で、活動的で、支配性があり、社会的接触を好む傾向があることが明らかにされている。

既に見たように、伊吹・木原（2021）は、「透過性調整力」がメタ認知と関連していることを明らかにしている。

「透過性調整力」と「オタク力」との関係に関しては、いくつかの可能性を認めることができるだろう。すなわち、「オタク」として何かに没入してきた人は没入しているときとそうでないときの切り替えを頻繁に行っているために、「オタク力」が高い人は「透過性調整力」も高いと考えることができる。他方、「オタク」として活動する中で他の人と関わる必要があまりないのであ

表3 透過性調整力の項目（水野ほか1995より）⁶

- 1 気持ちの切り替えがうまい。
- 2 何かするとき自分で決めて行動する。
- 3 その場にふさわしい行動をとるのが苦手である。
- 4 いつまでもクヨクヨすることがある。
- 5 思ってもなかなか行動にうつれない。
- 6 その場の状況に合わせた行動が自然にできる。
- 7 仕事はテキパキと片づける。
- 8 過ぎたことにはいつまでもこだわらない。
- 9 セルフコントロールがうまいほうである。
- 10 その場の雰囲気は苦勞なくとけこめる。

れば、「オタク力」を高めても「透過性調整力」を上げることにはつながらないとも考えられる。

なお、「透過性」の概念については、交流分析を提唱した Berne (1961) に遡ることができる。Berne は、「透過性」が低い場合には成人や子供としての心理活動を親の自我が除外してしまうような「除外」、「透過性」が高い場合には親の自我の一部が成人の自我に侵入してしまう「汚染」といった状態があることを指摘している。このように、Berne は、「透過性」を、常に重なっている複数の自我のうちどの自我が前面に出ていて、どの程度後ろの自我が見えるようになっているのかに関わるものとしている。

このことを踏まえると、「透過性」が問われるのは、ある自我から別の自我への移行においてでなく、複数の自我の重なりにおける後方の自我の表れ方においてであると考えられる。そうであれば、「透過性調整力」は、気持ちの切り替えが素早くできるということだけでなく、前面に出ていない自我を過剰に除外したり不用意に前面に出ていない自我に侵入させたりしないように調整する能力だと考えられるべきであろう。「透過性」あるいは「透過性調整力」をどのようなものとして捉えるかについては、検討の余地がある。

3.5. 「進路選択自己効力感」と「オタク力」

「進路選択自己効力感」は、Taylor & Betz (1983) による Career Decision-Making Self-Efficacy Scale (CDMSE) に由来するものであり、日本語では「進路選択自己効力」とも表記される。Taylor & Betz は大学生への調査を行い、進路選択自己効力感とキャリア決定のしにくさとの間にはやや強い関係があることや、学生の能力レベルが進路選択自己効力感との間に関係が認められないことを明らかにした (p.79)。

日本において進路選択自己効力感に関する研究は大学生を対象としたものが多いが、中学生や高校生を対象とした研究もいくつか見られる。以下、概観しよう。

矢田・吉中（2014）は、中学生を対象とし、時間的

展望との関係を調べている。矢田・吉中によれば、中学生において進路選択自己効力感が効果を及ぼすためには、「将来と現在は深く関連しているという認識」及び「将来のことを考える時、目標という観点から考えることの重要性」が前提となる (p.154)。

鹿内 (2015) は、高校生を対象に、親との関係と進路選択自己効力感との関連を調べている。鹿内は、親との関係において「尊敬」や「会話」が高い高校生は進路選択自己効力感が高いこと (pp.9-10)、高校 2 年生や 3 年生では「指図」が低い者ほど進路選択自己効力感が高く職業未決定との関係も高いと考えられること (p.10)、親との関係が「干渉型」より「尊敬・親密型」の方が進路選択自己効力感が高いこと (p.10) 等を明らかにしている。

山口・堀井 (2017) は、高校生が進路意識や目的意識が希薄なまま大学や専門学校に進学する「とりあえず進学」現象について、進路選択自己効力感⁷との関連を調べている。山口・堀井は、「とりあえず進学」する高校生について、大学や専門学校に次の目標を求めて進学する者とそうでない者がいることを明らかにし、その上で、進路選択自己効力感の高さは大学や専門学校に次の目標を求めて進学することと関連していることを示した。

富永・高野 (2018) は、キャリア学習によって育成される力として「人間として成長する力尺度 (中学生版)」を作成し、進路選択自己効力感⁸を含む他の尺度との関連を調べた。「人間として成長する力尺度 (中学生版)」の下位尺度はすべて進路選択自己効力感との間で中程度の相関を示している。

以上のように、進路選択自己効力感⁷は、中学生・高校生段階においてもキャリア学習において重要な能力の一つだと考えられ、キャリア学習や進路決定の過程において適切に高められることが期待される。また、鹿内 (2015) が示唆しているように、親との関係等の環境要因が進路選択自己効力感に影響していることが考えられることから、学習者の環境を把握した上で進路選択自己効力感向上を目指すことが必要だと考えられる。

「オタク力」との関連で言えば、「オタク」経験のある学習者が「オタク」としての経験が肯定的に受容され、「オタク」であることを進路決定に適切に活かすことができれば、進路選択自己効力感を高めることにつながることを期待される。

4. 考察とまとめ

本稿では、主に日本におけるキャリア形成に関する能力として提起されている諸能力について概観し、「オタク力」との関係について検討した。

まず、中央教育審議会 (2011) による「基礎的・汎用的能力」を取り上げた。中央教育審議会 (2011) は、「意欲・態度及び価値観」、「論理的思考力、創造力」、「基礎的・汎用的能力」の三つを同列に示しているが、「基礎的・汎用的能力」をキャリア教育の中心に置き、他の二つは周縁に追いやっていることが確認された。「基礎的・汎用的能力」が強調されれば、学習者の特性が捨象されかねないことや、具体的な職業と切り離して扱われやすいことが懸念される。「オタク」を自認する者においては、「基礎的・汎用的」とされる能力の一部の欠如を前提としつつも、実際の企業の人等と関わる機会を通して相性の合う人や職場と出会うことが重要であると考えられる。「基礎的・汎用的能力」の強調が、「オタク」を自認する人に不利益を与える可能性があることが確認された。

次に、他のキャリア関連諸能力と「オタク力」との関係について検討した。それぞれ異なる文脈で研究されてきた「キャラクター・ストレングス」、「ライフキャリア・レジリエンス」、「透過性調整力」、「進路選択自己効力感」の四つを取り上げた。

「キャラクター・ストレングス」は、一見、「基礎的・汎用的能力」と同様の能力のリストに見えるが、各人が自分の強みを伸ばすために使われるものであり、「オタク力」と重なる点もあると考えられる。「オタク力」に関係するキャラクター・ストレングスが学校教育で過小評価されず、適切に高められることが検討されるべきだということが明らかになった。

「ライフキャリア・レジリエンス」については、その概念自体にまだ検討の余地が大きいことが確認された。「オタク力」との関連では、学業以外に没入できる対象があることにより、他の役割が直面する現実を相対化した多面的生活を送り、キャリアにおける困難に対して長期的かつ楽観的に考え、対処することが可能となると考えられることから、「オタク力」を活かすことによってライフキャリア・レジリエンスを伸長させることができる可能性が示唆された。

「透過性調整力」についても、その概念自体をさらに検討する必要があることが確認された。「オタク力」との関連では、「オタク」として何かに没入した経験が、透過性調整力を伸長させる可能性も、そうならない可能性もあると考えられた。

「進路選択自己効力感」については、特に、中学生・高校生段階を対象とした研究について概観し、キャリア学習や進路決定の過程において適切に高められることや学習者の環境を把握した上で進路選択自己効力感向上を目指すことが重要だということが確認された。「オタク力」との関連では、「オタク」としての経験が受容され進路決定に活かされることで、進路選択自己効力感

向上につながる可能性が示された。

以上を踏まえ、2点を述べておきたい。

第一に、「基礎的・汎用的能力」を中心としたキャリア教育のあり方を再検討することの必要性である。児童生徒の職業的自立や社会的自立のために、どの児童生徒も身につけるべき一定の能力を定めることは、当然と思われるかもしれない。だが、キャラクター・ストレングスの考え方が示唆しているように、自分の強みとなる点のみを伸ばさせるといった考え方が否定されてしまうと、一部の者が不当に不利に扱われることになりかねない。また、ライフキャリア・レジリエンスの議論は、弱い点があることを前提とし、自らの弱さを受け入れながら困難に対処できるようにすることが重要だと示唆している。「基礎的・汎用的能力」が強調されてしまうと、弱さを受け入れることの重要性が見過ごされてしまう。諸研究の成果を踏まえ、「基礎的・汎用的能力」を中心としたキャリア教育のあり方について見直しを図ることが必要である。

第二に、キャリア関連諸能力の研究が、これまでの文脈を超えてなされることの必要性である。今回取り上げた「キャラクター・ストレングス」、「ライフキャリア・レジリエンス」、「透過性調整力」、「進路選択自己効力感」はそれぞれ異なる文脈で研究がなされていて、従来の文脈を超えて研究がなされる様子を見出すことはできなかった。本稿で従来の文脈を超えて検討を行ったところ、「ライフキャリア・レジリエンス」については「ライフキャリア」と「キャリア」の区別の問題、「透過性調整力」については「透過性」の意味の問題について、疑問を呈することとなった。従前とは異なる発想でキャリア教育のあり方を検討していくためには、関係する議論の流れをたどり、当初の議論から検討し直す必要が出てくる。社会の変化が激しい状況において今後のキャリア教育のあり方を実践的に検討するためには、関係する議論がそれぞれの文脈を超えて交わり、当初の議論の捉え直し等も含め、研究が深められることが必要だ。

本稿では、「オタク力」との関係を見るという視点から、キャリア関係諸能力について検討してきた。「オタク力」というかなり偏って見えるであろう視点をとることによって、キャリア研究に関して新たな知見をもたらすことができるということが、本稿において多少なりとも確認されたはずである。今後の「オタク力」研究を独自の文脈に閉ざすことなく、キャリア研究のさまざまな文脈と交わるものとして発展させていきたい。

yakuwari.htm (2021.12.23 最終確認)

³ 高橋・森本 (2019) においては、「性格特性的強み」とされている。

⁴ より細かく、「厳しい親としての私」、「やさしい親としての私」、「大人としての私」、「自由な子供としての私」、「合わせる子供としての私」の五つとすることもある。

⁵ 前場 (2019) においては「進路決定セルフ・エフィカシー」とされている。

⁶ 3、4、5は反転項目と考えられる。

⁷ 「進路選択自己効力」とされている。

⁸ 「進路選択自己効力」とされている。

引用文献

安藤りか (2021) 「なぜキャリア教育科目は『働くことの意味』を重要視しないのか：文献による検討」名古屋学院大学論集. 社会科学篇, 57(4), 99-114

荒木淳子・高橋薫・柏原拓史・佐藤朝美 (2020) 「地域の大人との対話が中学生のキャリア意識に与える影響の分析: ライフキャリア・レジリエンスと自尊感情に着目して」日本教育工学会論文誌, 44(Suppl.), 169-172

Berne, E. (1961) *Transactional Analysis in Psychotherapy*, Grove Press, Inc. New York. (繁田千恵・丸茂ひろみ訳『エリック・バーン 心理療法としての交流分析』星和書店、2021年)

Betz, N. E. (2001) Career Self-Efficacy. In Frederink, T. L. & Leong, A. B. (Eds.) *Contemporary Models in Vocational Psychology: A Volume in Honor of Samuel H. Osipow*. NJ: Lawrence Erlbaum Associates. 55-77

キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議

(2004) 「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/023/toushin/04012801.htm (2021.12.24 最終確認)

中央教育審議会 (1996) 「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (答申)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm (2021.12.25 最終確認)

中央教育審議会 (1999) 「初等中等教育と高等教育との接続の改善について (答申)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/991201.htm (2021.12.24 最終確認)

中央教育審議会 (2008a) 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について (答申)」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/information/1290361.htm (2021.12.25 最終確認)

中央教育審議会 (2008b) 「学士課程教育の構築に向けて (答申)」

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm (2021.12.25 最終確認)

中央教育審議会 (2011) 「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」

https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11402417/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301877.htm (2021.12.24 最終確認)

藤川大祐 (2020) 『『多数決ゲーム』から『群像劇ゲーム』へーゲーミフィケーションを取り入れた学校教育論の試みー』。授業実践開発研究, 13, 1-10

藤川大祐・渡邊文枝・見館好隆・小野憲史 (2022) 『『オタク』の意味論的検討』千葉大学教育学部研究紀要, 70, 印刷中

後藤文彦・久保秀雄 (2016) 「教育効果の汎用的指標となる透過性調整力：大学・個人・職場をむすぶ心の働き」高等教育フォーラム, 6, 1-9

本田由紀 (2013) 『『キャリア教育』より『仕事のリアル』』、日本教職員組合「点鐘」、2013年12月2日

¹ https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/career/detail/1312379.htm (2021.12.23 最終確認)

² https://www.nier.go.jp/shido/centerhp/kyouiku_career/

- https://www.jtu-net.or.jp/halftime/tensho/post_439/
(2021.12.24 最終確認)
- 伊吹勇亮・木原麻子 (2021) 「キャリア教育におけるメタ認知と透過性調整力との関係」高等教育フォーラム、11、11-19
- 伊住継行・石井志昂・高山瑞己・上山達稔・高橋良一・岡本晃典・青木多寿子 (2021) 「児童の自己理解を促す心理教育に基づくキャリア教育のクロス・カリキュラム開発と検証ー広域支援体制を活用した複数校での実践を通してー」教育実践学論集、22、1-13
- 経済同友会 (2008) 『企業の採用と教育に関するアンケート調査』結果 (2008年調査)
<https://www.doyukai.or.jp/policyproposals/articles/2008/080520a.html> (2021.12.25 最終確認)
- 経済産業省 (2006) 「社会人基礎力に関する研究会ー中間取りまとめー」
<https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/282046/www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/torimatome.htm> (2021.12.25 最終確認)
- 児玉真樹子 (2015) キャリアレジリエンスの構成概念の検討と測定尺度の開発、心理学研究、86(2)、150-159
- 厚生労働省 (2004) 「若年者の就職能力に関する実態調査」結果
<https://www.mhlw.go.jp/houdou/2004/01/h0129-3.html>
(2021.12.25 最終確認)
- London, M. (1983) Toward a theory of career motivation. *Academy of Management. The Academy of Management Review*, 8, 620-630
- 前場康介 (2019) 「大学生の進路選択セルフ・エフィカシーおよび行動変容ステージの関連」跡見学園女子大学心理学部紀要、1、37-45
- 見館好隆・小野憲史・渡邊文枝・藤川大祐 (2021) 「社会で働く上で求められる『オタク力』の可能性の検討」日本教育工学会第 39 回全国大会講演論文集、127-128
- 水野正憲・新里里春・岡野一央博・桂戴作 (1995) 「透過性調整力を加えた行動エゴグラム『S-BE (エスピー)』の信頼性と妥当性に関する研究」交流分析研究、20(1)、45-51
- 村上純一 (2016) 「キャリア教育政策をめぐるイシュー・ネットワークの変遷」教育学研究、83(2)、181-193
- Niemiec, R. M., Shogren, K. A., and Wehmeyer (2017) Character Strengths and Intellectual and Developmental Disability: A Strengths-Based Approach from Positive Psychology. *Education and Training in Autism and Developmental Disabilities*, 52(1), 13-25
- 人間力戦略研究会 (2003) 「人間力戦略研究会報告書」
<https://www5.cao.go.jp/keizai1/2004/ningenryoku/0410houkoku.pdf> (2021.12.27 最終確認)
- Park, N. & Peterson, C. (2009) Character Strengths: Research and Practice. *Journal of College and Character*, 10(4), np.
- 鹿内啓子 (2015) 「高校生における親との関係と進路選択自己効力および職業未決定との関連」北星学園大学文学部北星論集、53(1)、1-12
- Super, D. E. (1980) A life-span, life-space approach to career development. *Journal of Vocational Behavior*, 13, 282-298
- 高橋誠・森本哲介 (2019) 「基礎的・汎用的能力と性格特性的強みの関連における一考察：強みを活かしたキャリア教育の可能性」埼玉学園大学紀要人間学部篇、19、131-139
- 高橋美保・鈴木悠平 (2019) 「ライフキャリア・レジリエンスプログラムの開発と効果評価ー障害者の就職と定着を目指してー」教育心理学研究、2019、67、26-39
- Taylor and Betz (1983) Applications of Self-Efficacy Theory to the Understanding and Treatment of Career Indecision, *Journal of Vocational Behavior*, 22, 63-81
- 富永美佐子・高野康男「中学生はキャリア学習でどのような力を身につけるのか？ー人間として成長する力尺度(中学生版)の作成ー」福島大学総合教育研究センター紀要、24、39-46
- 渡邊文枝・見館好隆・藤川大祐 (2021) 「オタク力尺度の作成に向けて」日本教育工学会第 38 回全国大会講演論文集、301-302
- 矢田智美・吉中淳「中学生の時間的展望と進路選択自己効力ー進路成熟態度別比較ー」弘前大学教育学部紀要、111、149-155
- 山田智之 (2020) 「オタクの職業観に関わる研究」上越教育大学研究紀要、39(2)、407-416
- 山口源・堀井俊章 (2017) 「高校生の『とりあえず進学』と進路選択自己効力との関連に関する分析」教育デザイン研究、8、80-87